

印象深い大学図書館の先達たち

附属図書館事務部長 熊谷俊夫

1. 岸本英夫館長のこと（元東京大学附属図書館長）

今から3、40年前の国立大学図書館の多くは近代的とは程遠く、学生用の図書は極めて少なく、研究用に購入された図書の整理は滞貨として山と積まれ、わずかに保存図書館機能を部分的に果たしていたように思う。そのような時期に、東京大学にあって岸本英夫館長が就任され徹底的に東京大学の図書館改革に着手され、これが全国の大学に波及して大学図書館の改善、近代化に与えた刺激と影響は大きかった。当時、地方の大学図書館職員であった私にもその改善の動きは十分に伝わってきていた。

岸本英夫教授（宗教学）は昭和35年4月東京大学附属図書館長に就任したが、その6年前の昭和29年悪性腫瘍の病を宣告されていた。茅誠司総長から附属図書館長就任を懇請され、思い、悩み、米国の友人に相談し、その結果、茅総長から全幅の協力を惜しまないとの言質をとった上で承諾した。総長からもガン病の権威者である吉田富三教授の示唆により「月1回は必ず検査を受けること」の条件を付した。”図書館長への就任は図書館の改善を意味する。”との強い決意で全館員の陣頭に立ち東京大学図書館システムの大改革・大改善を指揮し、不治の病魔と闘いながら館長職に4年近く専心しその完成と同時に亡くなられた。まさに最後の生命を大学図書館の改善のため燃焼し尽くされたのであった。

岸本館長が東京大学図書館近代化のために行なった大改革は次の4つの柱である。

全学総合目録の編成が第一の改善事項である。

岸本館長は、大学の図書は何のためにあるの

かとの疑問を持ち、図書は読まれるためにあるので無ければ意味がない。そのためにはどこにどんな図書があるか分かるようにしなければならないというところからユニオンカタログの編成事業が始まった。当時、東京大学には蔵書が約250万冊あり、200近い部局図書館室に分散されていた。目録は和洋の著者目録130万枚に収録されていたが、中央図書館には部局の図書の目録カードは配列されていなかった。

岸本館長は部局の目録カード70万枚を新たにコピーして編成する計画を立てた。しかし、まだ乾式のコピー機がほとんど無い時代であり、普通の方法では短時日では不可能であった。まず部局図書館室の目録カードをマイクロフィルムに撮影することとし、二組の職員撮影班を組織して1日に1～2千枚の目録カードをマイクロ化していった。フィルムを片端から航空便で米国ボストンにあるゼロックス社に送付した。ゼロックス社にはフィルムから特殊な輪転機でロールカードに印刷できる技術があった。印刷された膨大なロールカードは船便でパナマ運河を経由して横浜港に輸送され、そこからトラック便で東京大学に到着する計画である。最初のトラック便が中央図書館に到着したとき館内では丁度会議が開かれており、会議を中断して皆が馳せて入口に集まった。はるばる地球を半周してきた梱包荷物を見て何ともいいようのない深い感激を味わったという。70万枚の目録カード複製3カ年計画はわずか1年で終了した。

いま、京都大学の全蔵書580万冊のうち、入力されていない約310万冊を入力するまでには長い長い年月と経費を要する。短期間に遡及入力ができる抜本的な方法がないのか。

図書館組織体制の確立が第二の改善事項である。

全学の図書を全学の研究者が利用できるためには中央図書館（後に総合図書館）と200近い部局図書館室の相互の協力、連絡調整をする機構の設置が必要であった。先ず、附属図書館基本規則を制定し、全学図書館連絡会議を設置し、学内図書館相互利用の制度を促進し、図書は最も適切な部局に置かれるべきとの考えから専門図書の学内移管を行ない、中央図書館地下には全学共用の「保存書庫」を建設した。

さらに、専門情報の交換を目的として附属図書館月報『図書館の窓』を発刊した。月報は全学に散在する300人近い図書館職員を有機的に結ぶ働きを果たし、全国の大学図書館にも配布されこの改善事業の様子を伝えた。

指定図書制度の強化充実が第三の改善事項である。岸本館長は、“学生のための教育をこれほどまでに忘れて良いものか”という義憤を感じて指定図書制度の強化を図った。東京大学ではすでに指定図書制度が行なわれていたが、その本来の機能を果たしておらず、学生の教育にとって重要な指定図書制度の更なる充実のために、教官に対して広報を強化し、教官指定から利用までの迅速化と受入・整理業務の迅速化とを図り、専任掛を設置し、指定図書購入費の学内予算増額を図った。

指定図書購入費はまもなく文部省で新たに予算化され全国の国立大学図書館にも配分されることになった。

中央図書館の大改装、改修が第四の改善事項である。中央図書館は関東大震災の復興計画として寄付により建てられ、モニュメント的な性格の濃い建物であったが、これを利用者本位の機能的な近代図書館に改造した。建物の破壊と新たな建設が行なわれた。記念室が学生の一般閲覧室に変わり、参考室、開架図書室、専門別閲覧室、教官用専用個室・個席室、演習室ができ、

書庫内には院生用に多数のキャレルが置かれた。

以上の改善事項のほかにも、文献複写、国際交換、貴重書管理の改善、停滞業務の打開や、東京大学では実施されていなかった館外貸出制度も開始させた。一連の改善策は東京大学図書館の近代化のみならず全国の大学図書館近代化の起爆剤となったのである。

この間、昭和38年には、ハーバード大学名誉館長K.D.Metcalf博士、副館長D.W.Bryant氏を招き、「大学図書館の近代化」について、全国各地で講演会、講習会、セミナーを開催し、自ら通訳を引受け、図書館関係者に多大な感激を与えた。また、新聞、雑誌に大学図書館近代化について執筆、その重要性を世論に訴えた。全国国立大学図書館長会議の会則を改正し機能強化を図った。以上の改革は何れも岸本館長の大学図書館に対する高い見識と愛情の深さを物語るものであった。

東京大学附属図書館改善記念式を昭和38年11月に挙行し、式辞の中で岸本館長は茅総長の熱意あるバックアップをはじめ協力頂いた関係者に深い感謝の意を述べた。1ヶ月後に入院そして昭和39年1月25日に逝去された。後を継いだ館長は、“原始林にブルドーザを駆って立派な道路を切り開いて”大学図書館の今後の進むべき方向を示したと称した。

ご遺族からの寄付金を基に記念基金が作られ、毎年の国立大学図書館協議会総会出席者からの寄付金を加え、『岸本賞』が設けられた。賞は国立大学附属図書館の図書館活動における功績、図書館情報学分野における業績のある職員に贈られる。現在は国立大学図書館協議会賞と改称されている。

2. 吉岡孝治郎氏のこと（初代東北大学附属図書館事務長）

昭和43年頃、私は勤務していた大学で吉岡孝治郎氏の講演を聞いたことがある。吉岡氏は新制大学発足後の昭和24年初代の東北大学附属図書館事務長に就任し昭和32年末に退官しているので、すでに退官後しばらくしての時期になる。講演の中で、当時の日本の大学図書館は、欧米のそれに比べ40年以上の遅れがあるという言葉のみが耳に残った。前述の岸本館長、D.W.Bryant氏が述べていた言葉である。

吉岡氏は戦前早くから東北帝国大学附属図書館医科分館、すなわち医学図書館に長く勤務し、医学論文を海外図書館と積極的に交換を行なうなどその幅広いドキュメンテーション活動は、「吉岡理論」"Yoshioka Principle"とも呼ばれて図書館界では内外に有名であった。また、記録によると、昭和初めから戦後にかけて地区大学図書館協議会や医学関連の図書館協議会において、学術雑誌の地区内共同購入や学術雑誌の共同保存の議題を提起しており、今日いうところの大学図書館間コンソーシアム形成や共同保存図書館のことでありその慧眼に驚かされるのである。

しかし、さらに驚くのは外国雑誌の価格高騰問題に対して行なった行動である。いま、世界最大手の学術出版社エルゼビア・サイエンス社が販売する電子ジャーナルの日本に対する高額な価格と円価格政策は、わが国の大学にとって大きな問題であり諸団体からの強い抗議にも関わらず進展はない。

しかし、同様のことが70年程前にもあり、こ

のときは吉岡氏等の貢献によって解決したのである。当時は、ドイツの医学や自然科学分野の雑誌高騰問題に関し、吉岡氏は英米の図書館関係者と密に連絡を取り合い対応策を協議し黙々と努力した。昭和10年(1935)5月マドリッドで開催された第2回国際図書館会議(International Congress of Library)は、ドイツ医学図書館値下問題に関して討議され、日米が協力して共同声明を発表しこれにより解決をみた。昭和10年9月9日以降の輸入雑誌について、ドイツ政府の補償により25%引きを実現させたのである。この立役者は東北帝国大学附属図書館医科分館主任司書吉岡孝次郎氏とアイオワ大学のブラウン氏であり吉岡氏の精細な資料が役立ったのだという(河北新報1936.2.22)。この会議で日米仏独ノルウェーよる定期刊行書に関する特別委員会が設置され、吉岡氏は日本代表委員に推挙された。

吉岡氏が退いた後の60年代の東北大学図書館には国際的な雰囲気が強かった。若手のO氏はフルブライトで海外留学、同僚S氏はミシガン大学図書館へ渡り10年余勤務して帰国。自宅を売却してその費用で海外図書館視察を行なった掛長もおられた。医学分館で吉岡氏の後輩にあたるN氏は管理職として以後多く図書館関係の国際的な場でも活躍された。これらはひとえに吉岡氏の国際的活動の影響であつたろう。吉岡氏は図書館関係者としては初めての叙勲を昭和42年に受けておられる。

3. 秦教勲館長（チンギョウフン、前ソウル大学校中央図書館長）

九州大学松原孝俊教授(言語文化部)は、永年ソウル大学校中央図書館に収蔵されていた旧京城帝国大学時代から引き継がれた蔵書の閲覧

を申し出てきたが両国の微妙な感情もあり約20年間歴代館長から許諾が得られなかった。しかし平成7年に就任した秦教勲館長(西洋哲学)

は即座に「歴史的な経緯はともあれ、大学図書館に所蔵する蔵書は人類共通の財産である。必要な人に公開することが図書館の務め」との理想から利用を許可し、閲覧が実現したのである。早速、国文学関係研究者12人による九州大学古典籍調査団が結成されて平成10年所蔵悉皆調査が1週間にわたり行なわれ、江戸時代などの和本の約3万冊の所蔵が確認された。中には類のない700点もの草双子や狂歌本200点のほか我が国に所蔵のない貴重資料などを含んでおり和古書3000点の目録が作成された。

その年の秋、秦館長が九州大学を訪問されることとなった。この機会に九州大学図書館で講演会の開催をお願いしたところ快諾され実現した。九州大学の歴史ある正門は近年普段は車を通さない開かずの門としていたが、杉岡洋一総長が今後外国からの要人を迎える際には正門から入構していただくとの計らいを決定していた。秦館長の来学はたまたまその第1号となり、ホテルに迎えて同乗していた私も正門を車で通り抜ける光栄に浴した。講演会は『情報化時代における韓日文化交流と大学図書館の役割について』と題して行なわれ、きわめて盛会裏に終了した。引き続き開催された電子図書館をテーマとする附属図書館研究開発室研究会においても秦館長の熱のこもった発表もあり討議は予定時間を大きく超えて終わった。

2ヶ月後、今度は我々がソウル大学校を訪問した。中央図書館6階フロアーには旧京城帝国大学時代に収集された約18万冊の東洋諸語を含む図書約30万冊が当時の分類順のまま配架されていた。日本の古い大学図書館の書架と何ら変わらない風景であった。気温と湿度の気候条件から虫害も全く無く、汚損も欠損もない極めて良好な状態で50年保存されていた。朝鮮戦争時には図書館職員がこれらの蔵書を遠い釜山まで苦勞して疎開させ守ってきたのだと言う。

さらに2ヶ月後の平成11年3月末、京都大学に転勤する5日前であったが、九州大学図書館とソウル大学校中央図書館との図書館交流協定調印式に出席のため有川節夫館長とともに私は再びソウル大学校中央図書館を訪れた。秦教勲館長の閲覧許可の勇氣ある英断から永く封印されていた研究資料が陽の目を見、斯界の研究促進と両国の相互理解、協力関係の構築へと発展し、いま、さらなる交流が重ねられている。秦館長は、日本の大学図書館の水準を超える電子図書館システムを構築し、また、貴重書の管理保全の改善などにも実にエネルギーに取り組んでおられた。一方で秦館長はとても気さくでやさしい紳士であり、日本の大相撲が大好きでいつも衛星放送で観戦していると車中で語っていたことが相撲放送を観るたびに思い出される。

(くまがい としお)

参考文献

- 1) 大学図書館の近代化をめざして：東京大学附属図書館改善記念論集／東京大学附属図書館編訳；第1集、第2集，東京大学附属図書館，1963
- 2) 東京大学附属図書館月報『図書館の窓』，1巻 - 3巻，1962.10 - 1964.12

- 3) 中村清 “ 独逸図書値下問題の経過と医科大学附属図書館協議会—特に吉岡孝次郎氏を中心として— ”，『図書館雑誌』，30 (2)，昭和11年2月，45 - 47
- 4) 九州大学附属図書館報『図書館情報』，34 (3) - 35 (1)，1998.12—1999.6